賢い定年ガイドブック

連載 第52回

ノンフィクション作家 桐山秀樹

「介護旅行」で元気を取り戻す

ヘルパー(左)の介添えで

介護保険のサービスは、訪問型と通所型に大別されるが、ともに食事、入浴などの介助が主となる。訪問介護では掃除、洗濯、買物といった支援も受けられるが、例えば、近所の散歩、日常の金銭管理、クルマを利用しての通院、室内での家具や家電の移動、庭の掃除といったことは、全て介護保険の対象外となる。

こうしたニーズに応えて、自費負担で受けられる様々なサービスが増えてきている。

民間会社には、シニアケア研修を受けた専門スタッフが、外出の付き添いや認知症患者の見守りをするサービスがある。

そうした中でも体験者の人気が高く、リピーター化しているのが、「トラベルヘルパー」(外出支援専門員)を伴っての買物、観劇、美術館巡りや温泉を楽しむなどの「介護旅行」だ。

「高齢者というのは、気分転換のため、外出したくてウズウズしている。単に病院や施設と自宅との往復ではなく、ちょっとした外出や小旅行をしたいと思っています。それを可能にしたのが、トラベルヘルパー同伴の介護旅行なんです」

と語るのは、介護旅行を専門に手掛けている「あ・える倶楽部」の篠塚恭一代表取締役。4年前には、NPO法人「日本トラベルヘルパー協会」を設立して、介護旅行の充実に努めてきた。

大手旅行会社も、バリアフリー旅行と銘打った各種ツアーを企画しているが、旅行サポーターが同行する団体旅行が中心だった。

対する「介護旅行」とは、あくまでも被介護者の側に立ったオーダーメイド旅行だ。

「介護される側の望む旅行を実現するのが目的で、近距離の場合は、あらかじめトラベルヘルパーが下見をして、コースや内容を企画し、必要な現地情報も仕入れておく。つまり、介護すると同時に、旅のアドバイスを行なうんです」

常連の中には、一カ月に三、四度、介護旅行で外出する高齢者もいる。

「現在の若者が集まる街に出かけたいと、六本木の新しいビルに出かけたり、秋葉原のメイドカフェを見学した方もいます。この他にも、特攻隊の生き残りの方々が、もう一度、鹿児島の開聞岳を上空から眺めたいとチャーター・フライトを希望されたり、サハリン生まれで、再び現地に行ってみたいという方もいらっしゃいました」

利用料金は、国内旅行の場合、介護の度合いにもよるが、一日二万一千円から二万六千二百五十円。海外旅行でも、一日二万六千二百五十円から三万一千五百円だ。それとは別にヘルパーの旅費、食費、旅行保険等は利用者が負担する。

両親の世話は専門家にまかせて、久し振りの家族旅行を楽しみたいという一家も多いらしい。

「介護する家族の側も、たとえ一日でも、その重圧から解放される。専門のトラベルヘルパーの仕事ぶりから、介護の知識を学ぶことも出来ます」

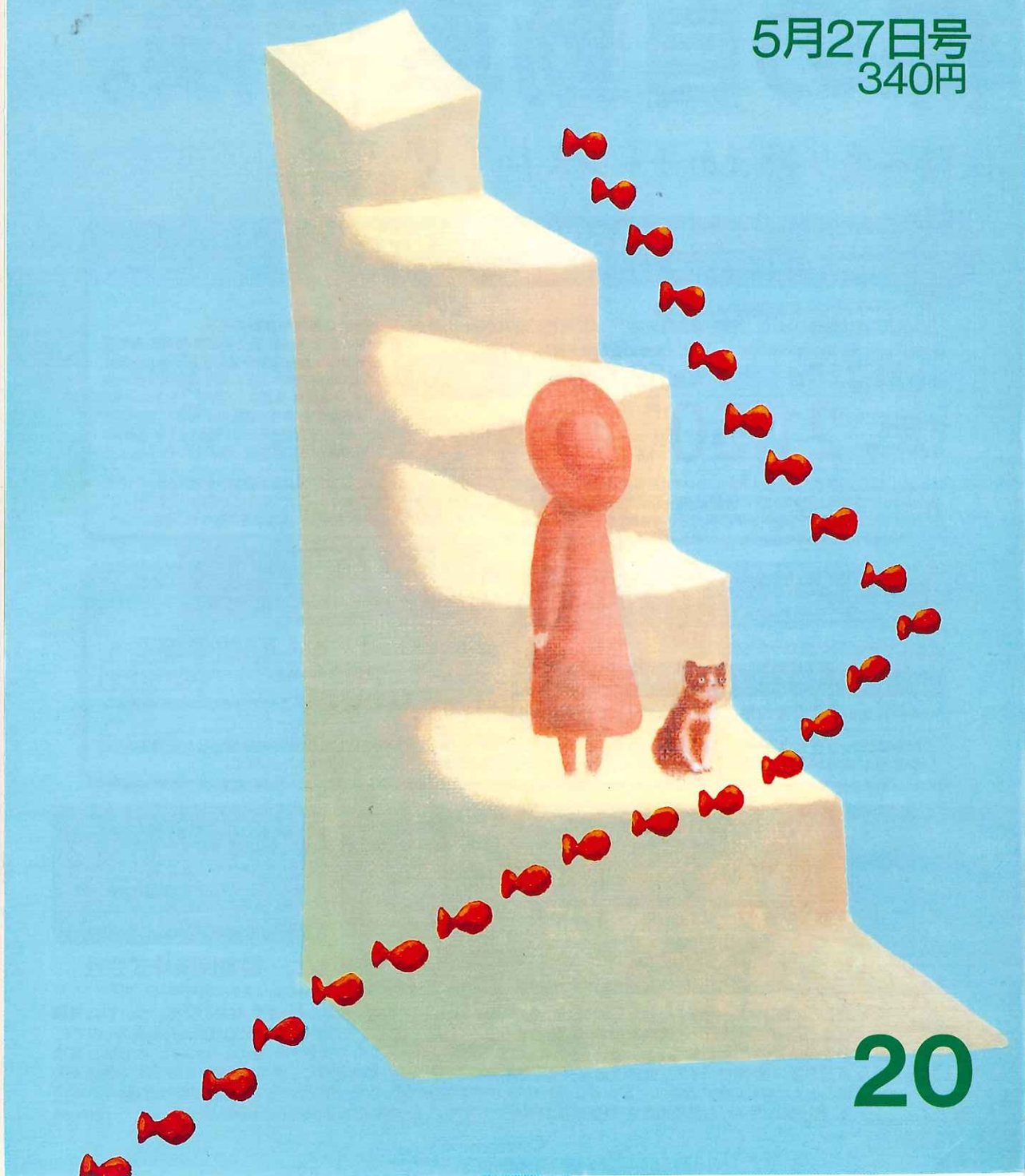
ヘルパーの多くは若者で、彼らは被介護者との世代の違いを楽しんでもいるという。

蓄えは必要だが、旅行に出て、元気や生き甲斐を取り戻すことも、長い介護生活の中では大切だろう。

昭和31年2月20日第三種郵便物認可 平成22年5月27日発行(木曜日発行)(5月20日発売)第55巻第20号

週刊新潮

5月27日号
340円



20